

あいであ & アイデア**使わなくなった農業用送水ホースを利用した首輪カバーで牛のストレス軽減**

千葉県農業共済組合連合会 松浦 優

はじめに

牛の飼養形態のひとつであるタイストール牛舎、いわゆるつなぎ牛舎では、牛はロープ、鎖などで首をつながれています。首の後ろは常にロープや鎖があたり、動くたびに擦られているため、脱毛したり、擦過傷を繰り返して皮膚が肥厚してしまっていることがあります。特に鎖の場合、ロープより重さがあるためか、擦れている部分の傷に細菌感染を起こして膿んでしまうことや、酷い場合には腫れ上がって鎖が首に食い込んでしまうこともあります。このような牛は、首が痛い、かゆいというストレスに常にさらされています。

このような状況にならないよう、千葉県山武郡芝山町で酪農を営む小川裕さんは、使わなくなった農業用送水ホースを利用して鎖のカバーとし、鎖の重みが一点にかからないようにすることで、少しでも牛のストレスを減らそうと工夫されているので紹介します。

(写真1、2)

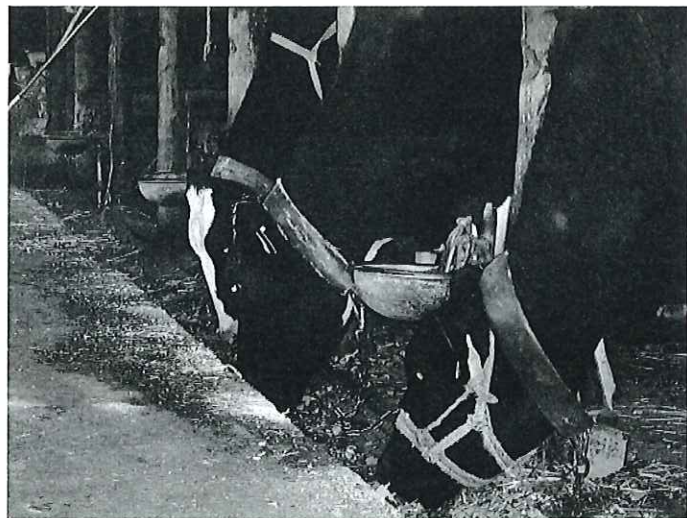


写真1

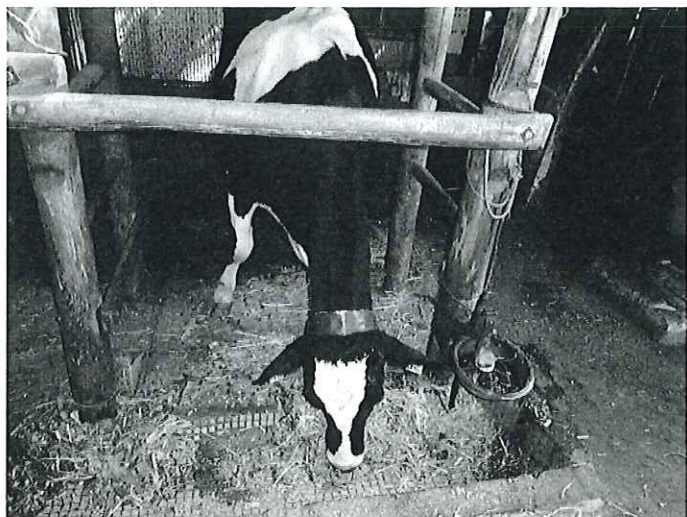


写真2

作り方

材料は幅約9cmの農業用送水ホースのみ。小川さんももともとは、他の酪農家で消防用ホースを利用した事例を聞いて、家の倉庫で眠っていた農業用送水ホースで代替しようと試みたとのこと。送水ホースは一般に入手しやすい上、軽く、耐水性と強度も優れているので利用しやすいメリットがあります。

方法は、鎖を約1mに切断した農業用送水ホース（写真3）に通し、牛の首にかけるだけです。ポイントは、鎖が当たる部分だけ覆うのではなく、首回り全周にカバーがかかる長さにする。牛が動くと鎖も回転するので、部分的につけるとずれてしまうからです。また、小川さんは牛が生後6ヵ月程度からこのカバーをつけた鎖を装着し、成長に合わせてきつくないように長さを調節しています。送水ホースは、1頭の牛が6ヵ月齢から終生同じものを装着し続けても壊れないほど、耐久性が高いそうです。

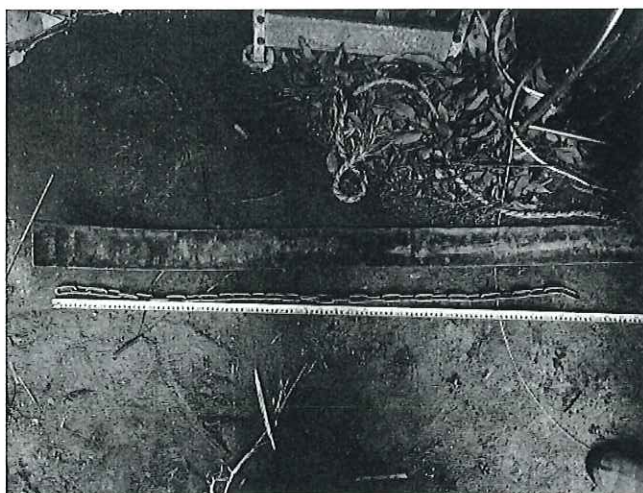


写真3

おわりに

この送水ホースによる首輪カバーの装着を嫌がる牛もおらず、「使用してから鎖で牛の首が傷つくこともなくなり良好な感触だ」と小川さん。捨てるしかなかった送水ホースでカバーするだけで首の不快感から牛が解放されるうえ、廃物利用のため新たな経費もかかりません。

本来、草原で「食っちゃ寝」していた牛たちもタイストールではつなぐしかありませんが、カウコンフォートが取り上げられることも多くなった昨今、少しの工夫でなるべく快適に過ごしてもらえるよう、倉庫に眠っているホースがあれば試してみたいかがでしょうか。

（筆者：千葉県農業共済組合連合会 東部家畜診療所 獣医師）